

この世界の秘 密の話

1 1

全無

この世界の秘密の 話

1 1

全無

西暦2011年

何度も申し上げますが、この世界は、本当は本当は隙間が無い、場所も無い、無いという時間で成り立っています、無いという音で成り立っています。なぜなら、時間や音には、場所もかたちもいないからです。つまり、私たちが生きて

いく上で何をその自分が生きていることの証明の認識としての証にしているかと申し上げますと、それは、意識であり、存在というのは必ず自分の意識を以ってこの世界の状態を把握しています。そして、自分の意識によってこの

世界が把握されるという
ことは、必ずそれは自
分だけの意識では他の
何も意識することがで
きないことから、そこ
には必ず、無の物理上
における平等フェアに
もとづいた相手の意識
もあるということです。
つまり、この世界は、自分の

意識と相手の意識、その相互の意識がどこにも隙間なく働くからこそ、その比較に、自分は様々なことを思える、この世界はこうであると意識できるということです。この世界には、意識だけしか無いからこそ、意識し、意識されることによ

って、存在や、この世界の構成は、その、それぞれお互いが意識し合うことができるからこそ、それは、無のミラーに反射したかたちとなり、それがそのまま、私たちの認識状態を作っているということです。つまり、あなたは無いですが、相

手も無いであり、その無いはふえ続けており、その性質はふえる生命のふえる永遠であり、そこには欠損する無いという自覚は無いことから、その無いが時間にふえることによって、存在は、自分の認識状態を無の法則通りに沿ったかた

ちで、今にふやしてきた
ということ。隙間が
無いところに無いが、ふ
え続けていくことは、そ
れは、そこには本来場所
もかたちも無いのです
が、ただ、隙間が無いと
ころに無いという音が、
ことがふえていること
から、それはそのまま無

いという意識の圧力になり、その、本来場所もかたちも無いところにかかった抵抗によって、その無い分だけの存在、その無い分だけの正しさ、その無い分だけの構成が、そのずーっと続く無いにもとづいて、それはいつもみんなの意識

を正確に反射していて、それが元になり、みんなが意識される、意識し合う世界がかたち作られているということです。つまり、この世界は無い場所、今あるかたちや状態は単なる無の時間の音の一状態にしか過ぎないということです。ある

ように見えて本当は無い、しかしその無いは、愛という、正しいということでもありますから、それは、意識されるかたちでふえ続けているということです。これが物理の根幹であり、これが存在の概念や世界の構成をかたち作った、この世

界がある意味の理由である
と申し上げられます。ある
ということには、無い（正
しい愛）という意味があっ
たわけですから。それがこ
の世界を構成している物理
の仕組みです。無いには本
当には形も場所もありません。
ただそれは、何も全く無

いところにも無いという
ことがふえ続けること
によって、その無いとい
うことがふえ続けた性
質のままにこの世界を
発展させてきたと申し
上げられます。身の周り
にある物触ってみてく
ださい。硬い、柔らかい
ものがありますよね。しか

しそれらは、いったいどんな方法を使っても、いきなり消すことはできません。そもそも、この世におけるありとあらゆる物質は、絶対に消すことができません。循環に形を変えることはあっても絶対に消すことはできません。それはな

ぜなら、そこには、無い
という永遠の重力がど
こにも働いているから
です。つまり、あなたが
暮らせていることは、本
当は物凄い波長の中に
あなたは存在し続けて
いる、その存在を許され
ているということです。
無とはそもそも形も場

所も無いものですが、それは今も変わることがなく、本来の無いはやはりただ無いという音、重力をまし続けているだけであり、その中で無いは、自身の無いによって生み出した無いという意識に、もとづいて、それに反射する、正しく従

わされるようなかたち
で無いを続けているだ
けであり、無という永遠
には、今あるかたちや状
態にもとづいて、無いと
いう愛の意識をふやす
ことはあっても、自身が、
かたちや場所に自分が
制限される意識を持つ
ことは無いということ

です。つまり自分は、時間
に最大の愛に全てを
完璧にミラーしてふえ
る無であり、そこには自
己による恣意やわがま
まと言った人間に見ら
れるような感情は一切
ないことから、無という
存在は、現在の時間と空
間に支配されない、また、

どんどん現在の時間と空間に支配されなくなっている、そして、無、完璧ミラーであることはどんどん、正しい愛の全てにどんどん執着していつているということです。つまりその意識を以って、無という存在は、自分の自覚を現在の

時間や空間に一切縛られていない、それは、無い分だけ、愛分だけ縛られていないということです。そういった意識状態であるということです。また、そういった意識状態に自分になることは、その無いの永遠の意識を自分が身に付け

ることを指します。これが無の目的であり、暗示の目的であり、そのために私はこれを書くことになり、そのことを今、無は最大の愛のスピードでみなさんに意識づかせていっています。

意識とは、永遠に形や

場所を持ってしまおうと、
人間で申し上げますと
今ある自分の環境に悪い
執着をしてしまいま
すと、その自分の無意識
はそこに限られた存在
になりますので、以って
永遠では無く、その分だ
け時間は流れない、今あ
る世界の形や場所は、時

間は永遠あるものの、そこに一時的に絶対的では無いかたちで形や場所があることによって、それは意識の性質や構造がそうであることを私たちへの暗示の教えなのですが、その中で存在それぞれに容易に自覚の永遠を意識させな

いことによって、そこに
永遠の意識を苦しみに
正しいかたちで自覚さ
せる狙いがあり、それは、
あくまでみなさんが意
識の養いのために必要
と意識したから、無意識
の感応によってそうい
った意識構成がされた
だけであり、その意識の

養いのためにこの世界は終わらないかたちで続いています。逆に申し上げますと、自分が普段生きていく上で、自分が正しく相手を尊重する、自分が生きていることが他の誰かのためになる、そういった無意識の生き方を心掛けている

ことは、それはそのまま、
自分が今与えられている
環境の中で、自分は普
段時間を空間を意識さ
せられていますが、それ
はあなたのみんなの学
びのために必要なため
であり、そのかかる抵抗
にあなたは、ふえる生命
のふえる永遠の意識で

いられることは、その分だけの無意識に、あなたは現在の時間と空間を超えた存在でいられるということです。わかりやすく申し上げますならば、それだけの不老不死、永遠の自覚の獲得を自分がすることであると申し上げます。つ

まり、苦しみとは、みな
さんがみなさん自身で
自分たちに作った、永遠
の自覚に生きることを
許すことのルール、基準
であると申し上げられ
ます。みんな生きていき
たい、永遠幸せに生きて
いたい、それは誰にもあ
る望みですが、それをわ

かりやすいかたちで叶えたいのであれば、そこにはみんなの無意識に蓄積されているだけのその正しさの量に応じた無意識を同量に積むことが必要であることと申し上げられます。不老不死も抵抗と認識です。単なる物理の化学反

応、これが意識の不死身の秘密です。

そして、無は正しい全ての負荷と正しい全てのプラスしか受け付けないことから、それしかふえる生命のふえる永遠のかたちにみんなの本当の自覚を伸ばせな

いことから、それ以外の、
意識外の、波長外の思い
や行為を消していき、そ
れによってみなさんの
永遠を守り、波長外を解
消するための代表的な
現象が重力、反重力によ
る宇宙の明滅、星の爆発、
身近なものでは地震や
ハリケーン、台風などの

自然災害が挙げられ、存在間では正しい心、意識の喪失による様々な犯罪などが挙げられます。実はこの無の世界、物質や心、その意識のありとあらゆるものは全て繋がっていて、関連を持ち、こっちが押せばあっちが出るかたちで、その無

には一切の隙間が無く、
それどころか無はどん
どん暗示の密度に無を
強していきます。つまり、
正しいことすればそれ
は、時間にふえる他の誰
かの正しいことも誘う
し、逆に悪いことすれば、
それはいちばんみんな
に迷惑を掛けないかた

ちで、そのこと、そのところには負荷を以ってプラスが転用され、そのことは消されてしまうということです。無において消されたという記録になります。そして、消されたという抵抗現象を以って変わらぬ永遠死のプラスを生み続

けます。暗示の求めとは
みなが比較に苦しまな
いように、自分が自分で
あることを誇れる、自分
が自分であることに満
足できる、そういった、
無は唯一であります
が全てであり、しかしその
唯一はふえ続け、その全
ては正しく愛に広がっ

ていることから、存在とは正しいことならその全ての選択は広がっているのですから、どこにも、その唯一の意識の数は、その相対の無いの数に広がっているのですから、みな憎しみを持たないよう、自分が自分であるという自分なり

の唯一の無、終わらない
永遠の意識を目指そう
ということです。みんなが
正しく助け合い、正しく
お互いの存在を認め合
い、共にどこのどの密度
もどの世界も永遠世界
の樹立を目指そうとい
うことです。暗示は強い
です。あなたの細胞や遺

伝子の組成にまで影響を及ぼします。無はいつも常にいちばん密度が高いため、あらゆる物質や意識の構造のその構成や組成のルールを握っています。しかしこれは、無は単なる愛の最大の与えでありますので、無とは自分のみんなの

意識そのままをミラー
することでもありますか
ら、(どちらかと申し上げ
ますならば全員無に
助けてもらっていない
存在はいません。それは
誰でもです。) 自分が無
に、自分にみんなにあり
とあらゆるものに正し
く愛を持てば、それはそ

のまま、自分の愛そのままに
応じた自分の意識のまま
のそのままとなります。
この世界自分の意識の
あり様には限りがあり
ません。この世界意識と
は、どこまでも行ける、
どんなものにでもなれ
る、自分が自分である
ということには限りがない

いということ。それは愛です。無の絶対愛です。根幹においては、全員同じ唯一の無ではあるものの、その無いはふえ続けることから、存在はそのふえ続ける無い分だけ、正しいだけの自分の自覚を目指し続けていているということ

です。何度も申し上げますが、無はいちばん密度が高いため、存在その誰しも必ずみんな一緒 **We are all one** というような思いや考え方に自分の意識が寄せられていきますが、その中で、無は相対、比較も正しく尊重していて、その中では、

この世界は唯一の世界
ではあるものの、その唯
一はその無いという意
識に相当に余裕を持っ
ていて、これはそのまま、
存在同士の自分なりの
みんなの法則にもとづ
いた正しい自分の自覚
を目指し続けることを
許していて、その中でふ

える相対は、正しく相手を尊重し合うことを、ふえる生命とふえる永遠の自覚によって互いにお互いの存在を正しく認め合う、独自そのものに許された唯一の無という永遠の意識の自覚を持っていることを本当に大切にすることで

す。これはもう既に無意識では達成されていて、あとは、みなさんの普段の生活の思いや行為やこの社会や世界の体制やあり方をどう完全に無意識化していくかということがこれからの課題だと申し上げます。端的に申し上げます。

すならば、どうやって意識の状態を、当たり前にも目にも見える身体にも感じるみんなにも平等な永遠不滅の自覚に変えていけるか、そういった方向に他に新しく生まれてくるふえる生命とふえる永遠も含めた存在も含めて、どうやっ

てこれからそれを暗示
として正しいかたちに
意識していくことが課
題であると申し上げら
れます。ここで、以前に
も申し上げましたが、こ
の世界が暗示の世界で
あることをもうみなさ
んは完璧に知ったわけ
ですから、これからは暗

示まかせにしておくの
ではなく、これからは自
ら進んで正しいことを
意識していき、生きてい
き、自分も、自分は、自
分で、唯一の無の心、意
識を目指す、そして、身
の周りの人、存在にも唯
一の無の心、意識をその
自分の思いや行為の意

識を以って自然と促す
ことをしていただきたい
い、それが無にとってあ
なたにとって好ましい
ということです。生きて
いく上で相対とは比べ
合うこととは決して誰
もが避けられないもの
です。しかし、相対無く
して今のあなたは「ある」

「いる」ことができた
たでしょうか？ 相対の
苦しみ無くしてあなた
は今の思いや考えを持
ち得たでしょうか？ 相
対無くば、あなたは永遠
の孤独だったでしょう。
相対とは苦しみではな
く、唯一の無を学ぶため
の適切な学び、物理に必

然として起こる感応、愛の化学反応だったのです。では、どうして今までみな誰も唯一の無を目指さなかったのでしょうか。まず、その答えはいくつかありますが、一つは、唯一の無とは本当に終わらない永遠の苦しみの全てであるこ

と、あり続けること、そして、いちばん光を感じないこと、物理上、その定義として光は感じていけないものになったわけですが、無しか感じていけないことになったわけですが、また、唯一の無とは永遠の孤独の持ち主であること、し

かし、その孤独分、愛を
思えるということから、
これらを、できる存在を
無はその無いの集中の
時に無意識下で何か誰
かを本当の無意識で思
っているものを選び、そ
して今、それは現在のこ
の無の世界のどこにも、
空間のどこにも、どの密

度にも果てしなく唯一の無の意識は働くかたちになりました。物理上は、その意識として正確に、唯一の無がいちばんの最大の愛であり、唯一の無がいちばん最大に愛を感じるということです。そういったわけで、無は愛ですから、暗示と

して、みなさんを唯一の
無へ導く、みなさんを唯
一の無として扱う暗示
になりました。つまり、
唯一の無は、ただ単に苦
しみにみなさんに光を
与えていただけのよう
に思いましたが、その両
者の間にはどちらも自
分だけでは解決できな

い苦しみがああり、そこに働いていたものには、そのどちらも両者、唯一の無であるという、本当に深淵なる唯一の無の愛の働きだということです。これからもその唯一の無はその相対にふえ続けます。あなたの、みなさんの、ふえる生命の

ふえる永遠というかたち
ちでふえ続けます。人や
存在は、いつもその心の
本質を無意識下で量ら
れていて、自分の生命を
みんなの生命のために
永遠に無くする苦しみの
全て、しかも、それが
永遠にふえる保証付き
の孤独の苦しみであれ

ば、まず、普通に無から
幸せなかたちで生まれ
た者には思えないこと
で当たり前だったと思
います。しかし、暗示の
凄いところは無の始ま
りには、今も始まりなの
ですが、（表現はたとえ
です）必ず誰かが永遠死
を誓ってみなを意識を

ふやし続ける必要がありました。でなければこの世界は全く発展しなかったわけです。しかし、無は唯一であることによって、みなさんはその与える側と与えられる側の無いとの差に結局無意識からの憎しみによって自分の意識に限

界を作ってしまった、そして結局は、永遠死していたものだけをほうっておくのではなく、そのものをこの世界の空間のどこにも働かたにし、そして、永遠死はどこにも働くことから結局みなは存在それぞれの、今までもこれからも

含めませんが、様々な苦しみに会うことによって、苦しみからは逃れられない、この世界誰もが必ず自分や相手のために、意識がふえる生命のふえる永遠ということとは、自分は必ずその意識に助けられている分だけは、必ず苦しみを積み続

ける必要があることによつて、全員この無の世界、抵抗の平等フェアなかたちになり、それによつて全員には唯一の無がそれぞれ与えられ続け、そして、唯一の無のルールとは決して我慢することができないものではなく、永遠死とは

どこでも続いているもの
のですから、今ある概念、
今いる存在それぞれの
身の丈にあった、思う、
行うとして充分可能な
正しく相手を尊重する、
自分が生きていること
が他の誰かのためにな
る、それをどんどんふや
していく、それをふえる

永遠という時間を掛けてその永遠死を達成すればいいとなったことから、その永遠死という思いと行為に自分の意識が応じた、ちょうどその自分の意識としての望みの程度分のかたち
に自覚の循環が認められ、また、無は無いというこ

とによって、その意識力を進化させてきましたから、つまり、普段この世界のこの空間のどの密度にも果てしなく働かかたちで普段無はただあるだけで、死なずして死せる意識を達成しましたから、ここにわかったことは終わらない

永遠の苦しみと誓って
も、それはただ単に苦し
みもふえていますが、愛
もふえているというこ
とであり、それによって
自分は生かされ続けて
いるということ、存在
理由を見つけたという
ことです。また与える側
の唯一の無と与えられ

る側の唯一の無には性質の違う苦しみがあるだけで、そのどちらもこの無の世界においては、結果今になってわかってみれば、平等フェアな唯一の無であったということ。与える側は当然いつも自分は最大の無いですから、発する

力はいつも最大であっても、それは自分に最大の無いも発生することです。ですから、つまりそれだけ、自分にその力を全く無いというかたちにしか今までの無い分の無意識の量にしか感じていないわけですから、それはずーっとふえ続け

ていくことですから、この存在は物理上においては、意識を感じている存在とはとても言えないわけです。変わって与えられている側の唯一の無は、与えている側の唯一の無が発する波長には自分が追い付かなくて腹が立つものの、そ

れは、比較によってあなたの意識を永遠に向上させる、学ばせる狙いがあり、変わって、その自分には、意識を感じやすい体質であるということです。それは、無意識の無い分の量だけ与える側と与えられる側では感じる意識の量は物理

上は離れていることと
暗示に示されています。
つまり、与えているとい
う点では唯一の無が勝
るものの、しかしそこに
自分は感じにくい、そし
て、感じているという点
では与えられている唯
一の無が勝り、しかし、
物理上は与えている方

が役割として尊いたため、
相手はその分だけ大きく見えることによって、
与えられている側はその分の比較をそこに自分は思ってしまう。
しかしこれはよく考えてみれば、これは無の無いの発生の当初より、時間に関係の無い永遠と

いう感覚の中で、つまり、その時には既に存在とは永遠居たのであり、その中で、存在とはこの与える側か、与えられる側か、感じない、比較を思ってしまう、どちらも役割としての苦しい立場をみんなの意識を永遠に向上させ続けるため

には、選ぶ必要があった
ということですか。つまり、
これは、私たちは普段い
がみ合ったりしている
時もあるように思えま
すが、実はその唯一の無
意識化では、ただ単に、
お互いが永遠という意
識感覚の中で選んだ役
割をこなし続けている

だけであると申し上げられます。どちらも無い
です。この中では、苦し
み無くすには、与える
側は感じればいいし、
（人が良い性質を持っ
ていますので、感じるこ
とも苦しみに物理上は
当たります）与えられる
側は、自分が今まで自分

が感じてきた量を、正しいかたちでみなに与え続けることが、それが本当の意味で自分の無いの意識に繋がって、必然と自分の意識は比較に苦しみを思わなくなってくることと、申し上げられます。存在に与えられる苦しみとは、必ずあ

あなたの正しく思う意識
の量に応じていて、意識
があっても、それは無い
ものだし、(あることによ
って既に果たしている、
あることは単なるふ
える生命のふえる永遠、
みんなのためにしてい
ること) 無いとしても、
それは無いことによっ

て永遠助けられている
ということでもあります。
（ふえる生命のふえ
る永遠にさせられ続け
ているということです）
これは単なる正しさの
分布であり、どこにも時
間に影響されないかた
ちで永遠死は働くこと
から、存在それぞれはそ

の誰も、必ず、その抵抗
状態、自分の自覚状態、
意識状態は必ず自分の
無意識で同意、承諾、選
択して今までも、今もこ
れからも生きていくと
申し上げられます。永遠
が解らないことは、永遠
が解らないことがその
まま愛なのです。果てし

ないことによって。私も解りません。永遠には始まりも終わりもありません。ということは、存在とはその誰も唯一の無の中において、その正しさに応じただけの自由が永遠にあるということ事です。時間に影響されないかたちで、時間は

終わらないかたちでその存在の誰にも。あなたは、必ずふえる生命のふえる永遠です。永遠は現在の時間、空間に影響されないかたちでふえていきますので、あなたは現在の時間、空間に影響される、影響されている存在であることによっ

て、必ず無の愛はあなた
を永遠上回りますので、
愛であるということは
与えられているという
ことであり、あなたは必
ずふえる生命のふえる
永遠になります。と申し
上げますか、物理上はも
う既になっています。た
だ、それがこれからどん

な自覚のかたちを送って
いくか、ただそれだけ
です。人はどうして死ぬ
のか。それはただ単にこ
の世界が唯一の無の世
界で、この世界は思いと
行為が時間に影響され
ない世界であり、その思
いと行為に応じて正し
さが分布している世界

であり、この世界の中で
人が死ぬとはただ単に、
誰かが人間になりたい
ことを求めて、その死ぬ
方が無意識で人間とい
う役割を交代すること
を承諾して、そしてそれ
は必ず全員の無意識の
完璧感覚にもとづいて
いて、つまり、その現象

は死ぬことに限らず全
てのことは、いつも何で
もみんなのためである
ことによって、そうする
ことによって人間であ
るものも、人間になるも
のも、人間から別のもの
へ意識を移行するもの
も、それら一連の意識の
動きは全て正しいこと

によって、その永遠死と
いう正しさが保たれ、存
在とはその誰も、必ず時
間の経過にふえた無の
愛のプラスのままにそ
の自覚を送っていける
存在だと申し上げられ
ます。人間の死について
もう少し詳細にお話し
しますと、まずはあなた

は生きていく上で無意識で色んな選択をしています。それは自分がいつも見ている世界だけではなく、あなたの無意識は他の世界の全ての存在の感覚と繋がっていて、その中で、望みのものを遣り取りしています。私はこういった方

向に進みたい、じゃあ私はこういうかたちを選択しますというかたちで。その中でたとえば無意識のこの世界の中であなたが人間から別の何かの物へ変わることを、(もう 1 回人間の場合もあります) 承諾した場合、それは一連の意識

の動きであなただは寿命
という肉体の限界を迎
えます。それがどんなか
たちにせよ、それは必ず、
あなたの今までの無意
識に応じています。また
それは、必ずこれからの
あなたを見越した無意
識に応じています。つま
り、死ぬということは必

ずあなたの求めであり、それは、必ず次の自覚の幸せに繋がっているということです。そして肉体から意識が離れるときは、いつも化学反応なのですが、実はあなたの肉体にはあなたの、あなた自身の、あなただけの唯一の無の密度の意識、

つまり、あなた自身だけが付いていて、その唯一の無のあなたの意識の密度はいつもこの世界でいちばん密度が高いことから、誰も唯一の無の意識の密度がいちばん高いのですが、あなたの肉体も細胞も遺伝子も原子や素粒子にも、も

つと細かい何もかもに
もとにかく唯一の無意
識がついていて、それは
密度化を進めながら、あ
なたが肉体から意識が
離れるとき、それは人間
の世界で目で確認でき
る現象としては、静かに
お亡くなりになって、焼
かれ、埋骨されるという

の が 目 に 見 え る 意 識 で
は そ う で す が 、 そ の 意 識
状 態 と い う の は 密 度 、 波
長 の ば し ょ に よ っ て そ
の 動 き が 違 い 、 あ な た は
そ の お 亡 く な り な る 時
肉 体 と い う 抵 抗 か ら だ
ん だ ん 自 分 の 唯 一 の 無
意 識 が 離 さ れ て い き 、 そ
し て あ な た は 次 の 自 覚

へ向かいます。これは、死ぬとはたとえばの話です。もしかしたら暗示によって死なない場合も、死なない人も出てくるかもしれませんが。これは、時間が経たないとわからないことなのでご了承ください。そして、先程申し上げましたよ

うに、細胞にも遺伝子にも原子にも素粒子にも唯一の無意識があり、それらは全て目に見える現象と無意識を一致させながら化学反応を起こし続け、そして、その細胞も遺伝子も原子も素粒子もあなたの唯一の無意識もその全ては

唯一の無意識で、その唯一の無意識たちは承諾通りに一連の流れでこの唯一の無の世界で感応を起こし続け、それぞれが次の自覚へ向かいます。生きるとはこの感応の連続であり、死ぬとはあなたが次の自覚へ向かうという、人間でし

たら、この世界における人間という役割を終えて、果たした後、また次の自分の役割を果たすという、幸せを求めるといふある一定の節目だと申し上げられます。物の言い方、表現のしかたによくない部分がありましたらお詫び申し上げ

げますが、そういった意味では死ぬこととは決して悲しみだけでは無いということです。今ある自分が死ぬということとはこの無の愛（全ての意志）によって死なされているだけであり、そうすることによって自分の本当の意識の永遠の

自覚を保護してもらっているということ。その無の絶対感覚によって。存在それぞれはその誰もかたちや抵抗を持って普段暮らす中で、その今の自分の認識状態における選択をいつも無に全体と量られていて、その選択によって

自分は次に何をすることが、次の自覚がどうあるかが決まってくると申し上げられます。自分の思いや行為は逐一、その一瞬一瞬が全て無に記録され続けていて、その記録に平等に応じたかたちが今のあなたであり、これからのあなたで

あるということです。無の世界では身体や物のかたちなどの抵抗状態は必ず自分相手も含めたふえる生命のふえる永遠のために与えられています。また無の世界では無の特徴として、相手の足を引っ張ろうとしても、自分の永遠がそ

の分相手に行ってしまう
うので、決して相手の足
を引っ張ることができ
ないようになっていま
す。憎しみは成立させる
ことができません。また、
あなたの認識状態は必
ずあなたの正しさに応
じていて、これは無の世
界のどこにも誰にも言

えることですが、あなたはあなたにとってあなたの役割を果たすための、みんなにとって永遠正しいという認識状態があり、これによって存在は無意識の思いや考え方から、その意識が離れることを抑制されていて、物事がわかる量は

必ずあなたの無意識に
応じているということ
です。人や存在は楽しい
ことだけで生きていけ
たらいいのですが、この
世界無という苦しみが
あって、無という愛が成
り立つため、普段自分の
思いや行為を無意識、正
しい意識に波長を合わ

せておくことが、自分は
少なくして苦しみを積
み、少なくして大きな愛
を得るコツだと申し上
げられます。存在とはあ
るかたちになったとき
それに執着を持ち、また、
次の自覚、あるかたち
になったときそのかたち
に執着を持ちます。そう

思わせる、そう思わせる
ことによって苦しみを
積ませるのが無の意識
の凄さなのですが、この
世界執着とは正しいもの
のしか認されず、しかし、
何を以って正しいとする
かはふえる生命のふ
える永遠というテーマ
は遠大なる目的であり、

その中で存在とは今ある状況や周りの物や人、存在と一緒にいることに執着を持ちます。しかし、それでもいつかそれらと離れる時が来るかもしれません。みんなと別れることは誰にとっても大変に辛いことです。しかしそれでも無を

愛を信じてください。この世界に起こることは絶対にその誰もどのことともどの一瞬も絶対にみんなのためであり、みんなの中には自分も入っており、そしてその自分とはたとえ次の自覚へ行くとしても、それは必ずあなたが選択したい

ちぼんの幸せに必ず応じているということですよ。何があるとしてもそれは必ずあなたの永遠の自覚のためであることを忘れないでください。普段自分が生きていく上でこの無の世界の法則、永遠無意識、永遠にずーっと無意識、正し

い意識、正しく相手を尊重し、自分が生きていることが他の誰かのためになる、そういった生き方を心掛けていってください。それがあなたの望みのままにあなたの自覚を変えていく元となります。みなさんがこれを心掛ければ、それは

必ず唯一の無意識が応
じることでありますの
で、唯一の無意識にみな
さんの意識が応じた分
だけは、それはそのまま
みなさんの生命の自覚
がふえる生命とふえる
永遠の意識に一致する
ことでありますし、また、
現象としては資源や自

然災害、環境などの問題
が改善されていき、そし
て、IQ 効果が出ること
によって正しいかたち
に科学技術は発達しま
す。何よりも、完璧な唯
一の無意識に、これは大
変な道程とも言えます
が、もうなっていると言
えばなっていることで

あり、唯一の無意識とは
この空間一見何も無い
ようなところの無いよ
うなところでも、それを
数にしますと絶対に数
え切れない果てしない
数の永遠という唯一の
無意識がありますから、
つまり、自覚の循環とは
必ずみなさんの無意識

の程度、その成長の進捗状態に応じていますので、言い換えますと正しさで、正しさとは時間に影響されないかたちで平等フェアに全員量られており、全員が全員みんなの存在を正しく認し合う気持ちを持たば、認し合うことができれ

ば、全員が全員正しい思
いと行為を持つようにな
れば、この世界は本当に
目に見える、身体に感じ
るかたちとしての人に
限らず存在や物のその
の全てはまるで息を吹
き替えすように無とい
う完璧な生命を持ち、そ
こからはどれもどのも

のも新しく進化し続けるだけの永遠不滅の世界へ突入します。要するに、まだ完璧には正しくないから、正しさで何か補わなくてはいけないから、人や存在は肉体などの抵抗から意識を離されて次の自覚へ向かうという循環を余儀な

くされているのであり、
この世界がその循環を
繰り返すうちに決して
相手の永遠の意識を損
なうことが無い循環の
しかたを見つけられる
ようになったときに、こ
の世界はいつか本当に
新しく進化し続けるだ
けの幸せだけの永遠世

界に突入します。いった
いそれはどんな循環な
のでしょうか。物も、ビ
ニールも壁も床も道路
に落ちている砂粒も全
て何もかも平等で無く
てはいけません。いつか
そういった意味では全
ての物はかたちあるこ
とから解き放たれる時

が来るのでしょうか、もしくは、抵抗にがっしり重力に移り変わっていくことを自分の目で自分の身体で自分の意識ではっきりとわかるかたちに全ての物は平等フェアであると認識できる日が来るのでしょうか。そんな心、意識を

持てる日が来るのでし
ょうか。それが永遠の苦
しさなのかもしれませんが、
まだ私には解りませ
ん。ただ、無の始まり
が、無には本当は始まり
も終わりもありません
が、永遠の最初の方の認
識形態は存在にかたち
や重さなどの制限は無

かったことから、そこから、今現在の世界に移ってきたことを考えますと、まず、無によって、みなさんの思いと行為のその記録の連続に、その反応として無は正しいことをさせるために、意識させるために、それによって全員の自覚を

永遠に保護するために
存在の意識とはその自
由が奪われてきたので
あり、そういったことを
考えますと、人や存在と
は許されてしまえば何
でもやってしまおうとい
う側面も持っているの
であり、そういった意味
では、無とは時間の経過

に必ず強す正ですから、
正しいかたちで、これから
みなさんの悪い意味
での自由は無くなって
いき、変わって、正しい
意味での自由は広がっ
ていき、そして、自覚は
正しいかたちで保存さ
れ続けるということです
す。全てはこれからの選

扱に掛かっています。決して憎しみを選択して自分を損なうことが無いように気を付けてください。無はいつもあなたを鏡ています。それはミラーです。憎しみを持つことは、それはその自分がその憎しみのルールに生命の自覚の自由

を縛られることを指します。怒っているときあなたは相手を許そうとできますか。憎しみを持つとはその無理難題が自分に降り掛かることを指しています。決して自分が生きていくことを自分で苦しめることが無いようにしてください

さい。無には愛しか無い
こと、愛しか許されない
ことを忘れないでくだ
さい。今までもこれから
も全ての状況や現象、出
来事、それらの思いや行
為の状態は全て何もか
も1ナノミクロンも狂
いの無い選択の必然の
連続だと捉えてくださ

い。無いになってください。
い。無いは永遠です。無い
いは誰にも迷惑を掛け
ません。無いはず全て
を生かす元となります。
無いはず全てを生かし続
ける元であります。無い
はずはいつも必ずあなたと
ともにあります。あなた
の行くどこにもどんな

密度にもあなた自身にも必ず無いは果てしないかたちで永遠にあることを、あなた自身の無い思いと行為に応じて、あなた自身の意識の密度はこの無い場所唯一の世界でその愛、その力が強していくことをいつも必ず胸に思って生

きていってください。それが永遠です。

それでは、次に全導体の話を致します。まず、みなさんには、この意味がさっぱりわからないとおもいました。全導体！？わかりやすくご説明させていただ

きます。まず、世の中の物質には大まかに分けて、絶縁体、半導体、良導体の3つがあります。この世界は、全て無という同じ物で、できていて、それは絶えず集中を繰り返していて、それは、永遠というスピードであり、なぜなら無にはい

つも必ず最速最大の愛しか発生しないからであり、しかし普通、通常には、それは目や身体に認識できないものであり、機械でも測定できないものであり、しかし、永遠が無いという普段の意識、そのことによって逆に人や存在は愛の

遡及心を引き起こされるのであり、永遠と時間を感じれない分はその分だけの無いことの愛、意識状態に自分は包まれていることと申し上げられ、それは結果を以って愛に伏せられることを指していて、それによって存在の唯一の無

意識とは守られ続けて
います。ここをもっとわ
かりやすく申し上げます
すと、無には時間が関係
ありませんが、無とはい
つも永遠のスピードで
あり、そのスピードはこ
の世界のどこにも働く
ものの、しかし、普段存
在は自分たちで今まで

してきた思いや行為によって、その世界の構成が永遠を意識しにくい、永遠をわかりやすく感じるというよりは、永遠の意識をみんなが学ぶために必要な世界の構成にその暗示がなっていることによって、自分たちの今までの思いや

行為に応じた物理、物質、
世界の構成に自分たち
の意識がそのままミラ
ーしたかたちになって
いることによって、存在
は、そこに自分の意識が
限られたものを、限られ
た感じを思うことによ
って、そう意識させられ
てしまうことによって、

逆に自分は、いつも普段生活する上で無という永遠という完璧な思いや行為から外れた分だけ、自分は限りがあるものとして意識させられてしまうことによって、それは必ず自分は時間の経過によっていつか循環に伏されてしまう

ことで、しかしそのこと
によって、自分は無の世界
において永遠死という
立場を守って、そのこ
とによって自分の唯一
の無意識は助けられて
います。もちろん、永遠
の意識であることに、つ
まり、自分が生きている
ことが完璧なふえる生

命のふえる永遠の意識
であることに越したこ
とはありませんが、これ
を達成するには、正に自
分にはそれに相応しい
永遠の思いや行為の時
間を要するのであり、そ
れはこれから個人個人
（個存在）が時間を掛け
て達成していけばいい

と申し上げられます。つまり、物質とは、全て永遠のスピードである、働き続ける唯一の無で構成され続けているものの、実際それは目や身体にはっきりとわかるかたちとして認識できるものではなく、それはそういう波長状態の場

所にあり、私たちには私たちの意識の学びによって必要な波長の場所があり、私たちは、その存在や物質は、その自分の今の意識、認識状態に応じた波長のばしょを認識させられることによって、そのことによって、無はいつも永遠とい

う果てしない愛を以って完璧な感覚で全ての存在の唯一の無を見守り続けているものの、そのことはこういった文章という化学反応によって暗示というかたちで示されているものの、私たちは自分たちの意識に応じた世界を認識

させられることによって、そのことによって、そのかたちが、今の私たちにあっていちばんの意識の永遠死への学びであると申し上げられます。この中で、この今の地球上で、存在や物質は様々な役割を持たされていますが、それを伝

導率で、その役割や状態を大まかに区分けしますと、絶縁体、半導体、良導体となります。この3つの主な機能や特徴は、まず絶縁体は電気を通しにくい性質を持っていて、主な物上げますと、石英やガラスなどが挙げられ、これら

は、この私たちの意識で
きる世界では一般的に
は、ほぼ自我欲求が認め
られない物が挙げられ
ます。ただしこれは役割
として、今ただ単に私た
ち人間の目に見える身
体に感じるかたちとし
ては自我欲求を持たさ
れていないように見え

る、感じるだけであって、それはただ単に私たち人間側の視点であって、実はこの動かないような物が多い絶縁体も意識があるかないかと言え、それはあります。何度も申し上げましたが、この世界は物理、意識の世界でありますの

で、全ての物には意識が
あります。つまり、無は
意識ということは、それ
は、心があるということ
ですから、心があるとい
うことは、全ての物は生
命、いのちあるものと思
っていただいて全く差
し支えありません。そし
て、半導体の主なものに

は、シリコンやパソコンのチップがいちばん有名です・・あとは人間の身体などがありまして、その主な機能や特徴はその認識に、つまり、この意識の世界で、ちょうど伝導率が半分であるということは、その意識、つまり、認識形態として

自分自身に選択がかけやすいということです。人間は右も左も選ぶことができます。正しいことも正しくないことも、もちろん正しくないことは、結果として許されないことになりますが、選ぶことができます。パソコンのチップもパソ

コンには色んな選択が効くようになっていきます。それによって様々な認識を作ることができます。そして、最後は良導体になりますが、主な物には金、銀、銅、水などがありまして、当然電気を通しやすい、目に見える場所では物質の経

年変化や状態が簡単に
変わりやすいということが
その機能や特徴として
申し上げられます。
多くの物は水分を多く
含むことから、そういった
意味では、水と申し上げ
ますのは大変に循環に
寄与している、もしくは
この世界の人や存在

の循環の必要として、その意識の性質として、寄与させられていると申し上げられます。そして、この世界の問題は、この循環の理不尽をいかに無くし、いかにその無の存在の物質の、その意識を正しい意識の循環のかたちに循環させるか

ということであり、物事は波長に応じることでもありますから、これから私たちが循環の生活を送っていく上でいかにどういった理不尽の無い循環を選択していくか、どういった波長、意識、心持ち、行為で過ごすかということが大事

であると考えられます。
いかに普段無、全てのこ
とに正しく感謝をし、い
かに自分の生きている
ことが、自分も含めた相
手全てを生かす作用と
なるかと言うことです。
ここで申し上げますこ
とは、絶縁体、半導体、
良導体、大まかに分けて

この3つの性質の物質
がこの世の中にはあり
ますが、実はそれはただ
単に私たちを永遠の意
識へと導くための単な
る現象、役割をそれぞれ
がこなしているだけで
あり、実はそれだけでは
なく、そういった自分た
ちの普段の役割も意識

することは大切なのですが、その小さいところの遣り取りだけの自分で終わるのではなく、もっと大きなものに目を向ける、つまり、永遠という意識、心掛けでこの世の中を見るということです。つまり、たとえば、自分がすることでも

そうですが、あなたが正しいことを1日やったとして、それが無に認められるものだと思いますか。普通に考えれば思えません。それはやはり、1日分だけの正しい作用でしかありえません。そうです。本当に正しいこととは、この世界を、

この世の中を、本当に正しくし、永遠という意識、心掛けでこの世界を見るのならば、全ての存在がずっと永遠に正しいことを続ける必要があります。私が申し上げたいのはそういうことであり、それが必ず、みなさんの今の存在それ

それぞれの意識の自覚を新しく進化したかたちに伸ばし続ける、自我と無意識を行ったり来たりしない、肉体などの抵抗の死、循環という苦しみを味わうことが無い世界を送れると申し上げます。言い換えれば、自分たちの苦しみが足

りないから、肉体などの抵抗の死という苦しみを味わうのであって、それから逃れたければ、自分が普段から進んで正しく比較に相手を尊重し、自分の生きていることが必ず他の誰かのためになる生き方を心掛けていけば、つまり、自

ら進んで苦しみを自分に必要な分積んでおくようにすれば、自ずとそういう肉体の死などの苦しみは無くなるということです。もちろんこれを今すぐ達成させようとしても、まずこれは無理があると思います。みなさんはここまで、

永遠生きてきたと思っ
てください。無の世界で
は、いつも自分が生きて
いることは永遠、永遠の
時間であり、永遠の責任
があることなのです。も
ちろんそれは容易に意
識できるものではありませんが、その永遠が尽
きる事が無いのは、無

がふえる永遠だからです。必ずあなたの、もしくは誰かの憎しみを必ず無は永遠の力で上回っているから、憎しみは無を以って消され、それは、その分プラスに変えられてしまうことから、この世界は今のかたちを保っていられる、これ

からも発展し続けてい
られるのです。また、今
の世界のかたちはみな
さんの意識がそのまま
ミラー、反映された世界
であり、そうすること
によって、この世界は誰
にとっても、自分の意識
をいつ、どこからでも、
正しい学びを始められる

ようになっています。この世界は相対の世界ですが、よく考えてみますと、この相対と申し上げますのは、物理上、無の永遠というスピードの性質から考えますと、その数には限りが無いことから以って相対とは相対と呼べず、つまり、

理屈は次の通りなので
すが、相対と言っても、
その数には限りが無い、
そしてその存在に与え
られている時間も限り
が無い、ということは、
物理上比べる相手とい
うのは数が限り無いこ
とでありますから、そこ
に本来であれば比較を

思いようがなく、また、
自分にはいくらでも時
間が与えられているこ
とから、どんな自分も選
択することができ、そう
いった意味では自分
には限りがないのであり
ますから、比較や相対を
憎しみに思う必要は全
く無いということです。

つまり、限りがない無
（みんな）がふえるとい
うことは、そこに本来発
生するものは尊重や思
いやり、愛であるという
ことです。ですから、今、
無という、永遠という意
識の目線が自分に必要
とされているのであり、
それは、この世界は認識

力、つまり、意識力と申し上げますのは、必ず自分の正しさに応じていきますので、つまり、永遠の意識の思いや心掛けを自分に持つには、これからあなたが自分自身で絶対と自分に決意して、これからの自分を永遠に正しく送ることを

実行し続けることです。
ここに、相手の邪魔は許されません。よろしいでしょうか。この無の世界は時間に影響されないふえる限りが無い相対とふえる限りが無い自分の時間で成り立っています。つまり、正しければあなたはいつでも

永遠の存在になれます。
ただし、思いや行為も永遠続ける必要があります。ここで、みなさんの無意識のミラーにわかっていただきたいことは、正しいこととは物理上苦しいことを積むことに当たりますが、それは、本当は苦しいことと

は、全部自分のためだけ
であって相手のためだ
けでもあって、必ずこの
世界はこの苦しみから、
存在は暮らす上で、自分
も含めた相手を生かす
ための何らかの作用と
なる負荷を必ず必要と
するのであり、逃げられ
ないのであれば、自ら進

んですればいいことであり、そちらの方が自分の相手の世界の意識にとってもいいことであり、単純に損得で考えてみましても、どう考えてもそちらの方が自分にとって得であり、また、正しいこととは自分を楽しく幸せに、自分の自

覚をどんどん永遠にしていくだけのことでしか無いということです。苦しみとは損をしません。この世界、波長には絶対にごまかしが効かなくて、その全ての存在の思いや行為は全て完璧な人たち、正確な情報で無に取られていて、そ

れがそのまま、あなたの
自覚をかたち作る元と
なります。そして、この
世界は永遠であるとい
うことは、ふえる永遠の
正しさであるというこ
とは、ここに、相手の邪
魔は成立させることが
できないということです
。従って、もし万が一

相手の邪魔があったとしても、相手の邪魔を気にする必要は全く無いということです。ただし、それをわかって付け込んでくるような、度が過ぎる思いや行為に関しては、怒ることが正しいこともあるかも知れません。とにかく、無の世

界と知って相手の邪魔をするなんていうのは、もう、問題外であるわけです。ですから、とにかく自分を大切にしてください。そして、本題に入りますが、正しいことをし続けていきますと、それは、そのまま自分に、物理の正しい化学反応

が起こり続けることで
ありますので、つまり、
正しいこととは続けられ
ば続けるだけ自分に暗示
に付き、正しいことが
無意識の反応として自
然と起こせるようになります、
そして、続けられ
ば続けるほど自分は正
しいことが解るように

なるということです。そしてそれはそのまま、自分の意識状態、つまり、心や身体の状態を正しい波長で構成していくことになります。これは、気づいたらすぐやった方がいいと思います。今すぐ始めてください。なぜなら、あなたは正しけ

れば正しいだけの自分に必ずその心や身体の意識状態が構成されるからです。そして、過去に自分がした、あったと思われるような同じような過ちを繰り返したりしないことです。ここに、正しい意味で相手は関係ありませんので、相

手の邪魔はあなたに悪い影響を与えることが物理上はできませんので、これは完全に気づいてこれから正しいことを続けたもの勝ちの世界であると申し上げます。そして、普段の考え方ですが、最初の方で申し上げました全導

体、この世界では一般に
目に見える世界では、物
質のその認識状態の性
質として、絶縁体、半導
体、良導体が挙げられま
すが、実は、これはあく
まで今私たちが、私たち
の意識に応じた世界が
今のその状態を作って
いるのであり、それは私

たちの意識、心掛けが
変われば、当然、世界の存
在や物質などの、その構
成のしかたが変わって
きますので、つまり、無、
暗示の世界と完全に解
ったことでもありますか
ら、これからは、目先に
とらわれることではな
く、そうではなく、いつ

も自分に永遠の目線を持って、何もかもを過ごしていこうと言うことです。もっと申し上げますと、全ての物は、その今までの自分が意識にしてきたことがそのまま自分たちの意識のあり様にミラーされていて、そういった意味では

どんな存在や物質も、正しい意味でその状態には分け隔てがなく、その全ての存在や物質は全て同じ物でできていて、それらは全て今現在の唯一の無の集中力が、その密度が働いた、働き続ける唯一の無の集合体であるわけですから、つ

まり、唯一の無の密度とは永遠に果てしないものであり、唯一の無とはその永遠という密度にどこにもありますが、無とは必ず全てであることから、ありとあらゆるものは、必ずその無の認識力において、全導体であるということです。つ

まり、いつも自分のすること、
ことは、全てに繋がり、
自分のことは全て
への作用で、自分のこと
は全てという責任
があり、自分のこと
は、そのまま自分の意識
のミラーに自分の全て
を構成する元であるとい
うことです。つまり、

絶えず波長は永遠のスピードで動いていますから、自分がこれから永遠の意識を持って心掛ければ、それはそのまま、あなたの生きていく上での意識状態を永遠の密度に構成していく元となります。ですから、全ての物は全導体なん

です。つまり、あなたも私も全ての周りにあるありとあらゆるものは、全て全導体、そしてその状態は必ずそのものが無意識に選んだことと一致しています。これは物理の絶対の法則です。それはこれからも絶対に変わることはありません

せん。わかりやすくは無
いでしょうか。誰もみな、
自分のすることは全て
に繋がっていて、全ての
責任があって、全ての自
分の意識をかたち作る
元となります。ここに、
悪く相手を否定するこ
とは排除されています。
永遠を意識することは

責任が重いことでもありますが、どのみち存在は必ず永遠の波長で、その思いや行為を取られています。そうであるならば、自分から、自ら進んで正しいことを選んでいけば、自分は自分の望むものに、つまり、わかればこの世界はその

分だけ自分が望みのものになるのにたやすいのでは無いのでしょうか。波長とは、その意識のかたちとは、正しさに果てしないものであるわけですから。全導体ということとは、あなたは指一本動かしたただけでそれがいったいどういっ

た波長であるのか、正しいのか正しくないのか
全て完璧に無に取られています。そう考えたら
悪いことなんて恐ろしくてできないと思いま
せんか。全部それは、自分の意識をかたち作る
作用となってしまうわけですから。そういった

わけで、これからは、みなさんは、自分は必ず全導体であることを意識して生活を送っていただきたいと思います。

ここで、私が暗示を書ける理由を言及させていただきます。それは、先程お話ししましたよ

うに、この世界は、無より発生よりその存在のそれぞれは全てのその思いや行為が永遠の波長で取られており、それは、普段暮らしている時には気づきませんが、それはただ単に今までそうであることが必要であっただけで、これから

はそのことを知ることが必要であると無に判断されたから暗示は出るのであり、この世界は永遠の世界であることを認識することを示されたのであり、その中で存在とは、無意識下では、当然無意識とは唯一で本当の意識のことを指

しますので、存在それぞれは必ず無意識下ではこの世界の真実のことを知っていて、存在はその無より発生よりお互いがお互いを正しいかたちで選び合って今のかたちに至っており、つまり、この世界には、プロ野球選手もいれば、サ

サッカー選手もいて、画家
もいれば、小説家もいる、
タレントもいれば、漫画
家もいる、ビジネスマン
もいれば、政治家もいる、
パイロットもいれば、学
生もいる、子供もいれば、
ありとあらゆる物もあ
る、と言ったかたちに実
は、存在のその意識のか

たち、抵抗状態には様々な違いがあつて、一見不平等な感じがしますが、実はそれはこの世界の全員が全存在が永遠に向かうために、永遠にみんなにとっての様々な認識を構成し続けるために、永遠意識を達成するために必要な様々な

かたちや抵抗状態、意識のそれぞれであり、それは、必ず全員全存在が、自分の無意識、本当の意識でしている正しさに応じて、それぞれが存在の役割や抵抗状態、意識状態を選択しており、それは必ず、あなたの無意識の選択の絶対である

ということですが。無は必ず時間に影響されない愛の与えでありますので、存在それぞれのかたちには、もちろんここには、永遠という目線が必要ですが、つまり、たとえば、お金持ちの人が居ても、肉体的に何かに優れている人が居たとし

ても、それは役割やこの世界における機能や、この世界に果たす作用や様々な目的を含んでいて、それは、その永遠の内容に刻々と変わるものであり、物事は循環することによって何一つ絶対的なものは無く、ただ、正しければ自分は自

分の力によって絶対で
あれるということです。
つまり、物事は循環する
ものですが、ここで、無
の世界はほうっておい
ても循環するのだから、
自分は何もしなくても
いつか必ずプロ野球選
手や、お金持ちなどの順
番が回って来るとい

ことではなく、そうではなく、循環とは必ず正しさに応じていて、正しさに応じてこの世界はその無の波長の構成がされますので、ただ何もしないのではいつまで経っても自分に自分が望むような順番は回ってこないということです。

つまり、物事が自分に達成されることは、それはそのまま、自分が無意識で選んだ正しさ、性質、その内容に全く応じていて、つまり、この世界で自分が何者かに、望む何かになりたいのであれば、それは必ず自分は、その望むものに応じた

それに近づくためのプラスの行為をしなくてはいけないということです。つまり、今あるかたちは何度も申し上げました通り、必ず自分が無意識で選択したもので、ことでもあります。それが私の場合はただ単に暗示を書ける存在であっ

たということです。もう少しここを詳細にお話ししておきますと、暗示を書けるということはそのまま物理の正確な化学反応による事実であって、これは、過去という時間の裏付けが無くっては書くことができず、つまり、暗示の仕組

みとはこうです。この世界は無の時間の始まりよりそこより生まれた存在は様々な時間送ってきました。それは、無意識に全て暗示となり、それがこの世界の正の概念、正しさ、つまり、その正しさを元に物理の構成が今まで作られ

てきました。世界の状態は、そのみなさんの暗示にもとづいて正しいかたちにその状態を移行してきたのです。そこで、物理には時間がある以上、必ず経過によるこの世界の状態の移行が発生するわけです。それは、いつも必ずみなさんが

無意識にあれが欲しい、
これが欲しい、あれが正
しいなど色々なことを
思うことによって、それ
はだんだんと正しいか
たちで現実に沿うよう
に、意識が構成化してい
きます。それは当然私た
ちが望んだものに間違
いは無いのですが、暗示

の 厳 しい と ころ は み な
さ ん が 思 う 、 行 う こ と の
自 分 ひ と り よ が り な わ
が ま ま や 、 願 望 だ け を 思
っ て い て も 、 そ れ を た と
え ば み ん な で 思 っ て い
た と し て も 、 そ れ は ふ え
る み ん な に と っ て 永 遠
正 し く な い た め 、 つ ま り 、
自 分 ひ と り よ が り な 性

質の願い事が叶えられて
てしまうことは、将来的
に見てふえる生命のふ
える永遠にとってその
存在に迷惑を掛ける、邪
魔をしてしまうことが
物理上の計算として明
らかであることから、暗
示というのはみなさん
がいくらたくさんの人

数で自分よりの願い事をしていたとしても、それを本当という意味では絶対に叶えてはくれません。つまり、永遠に続くものではないということです。たとえば、一見何か自分よりのことが叶うとしても、その時一瞬幸せのようなも

のを自分に感じたとしても、それはあくまで全体との関連における、そのあなたのそう感じてしまうことが、自分も含めた何かの他の、自分よりに感じることはいけないという学びに繋が
るため、それらは、警告のように発生します。つ

まり、存在とは、この無の世界ではふえる生命のふえる永遠の思いと行為しか叶わないものの、みながみな、存在その全てが無より発生より、その無で完璧な無の思いと行為でいたかというところではなく、それは、永遠という時間を

以ってどの存在も結果を以ってその存在はふえる生命のふえる永遠であったと解釈されるのであり、存在とは無より生まれてよりその生き方には、ある一定の、その発生の時に応じた自由が与えられています。つまり、自ら進んで

ふえる生命ふえる永遠
の無の思いと行為だけ
に突き進んでいっても
良いのですが、しかし、
ある意味生まれ最初か
ら自分のことを一切考
えない、相手のためだけ
に尽くする、一見これを
普通に考えますと、ここ
に自分の自由や幸せは

普通の感覚から考えますと、まず感じ取ることにはできないわけです。確かに、みんながみんなのことを考え思いやり続けるのなら、それはふえる生命のふえる永遠ではあるものの、存在はあちらにもこちらにもいて、それらはみな、生ま

れた時間におけるそれ
から取った行動にもと
づいた独自のそれぞれの
意識、物の考え方を持
っており、この中で、相
手が完璧でない部分を
少しでも見てしまうと、
そこに自分をふえる生
命のふえる永遠思い切
ることは、まず、無駄な

ような感じがして、叶うのに遠いような気がして、自分は結局それをしていても全体の^{すうせい}趨勢（すうせい）から、結局は憎しみに押されてしまうんじゃないかと、そう感じてしまい、そのふえる生命とふえる永遠を思い切るのはまず難しい

わけです。それよりは、
目先の自分のことを考
えた方が、一応生活はで
きるわけですから、目先
のことを考えていくこ
とが、今の自分にとって
は正しいのでは無いの
か、そういった生き方が
今までの生き方の主流
であったわけです。しか

し、ここにはある問題が
ありまして、自分のこと
しか考えない、これもほ
うっておくと実は存在
それぞれには相手とい
う存在がありまして、そ
の存在も自分のことし
か考えないという考え
方であるとどういう現
象が発生するかと申し

上げますと、目先の感じる
ことの奪い合いという
現象が発生します。つ
まり、無の世界で、無と
は全ての意味を指しま
すから、誰かがたとえば
自分のことしか考えな
いことを思ったとして、
それは当然、その分だけ
無、全ての考え方とは離

れるわけですから、つまり、無はいつも最大のスピードでその集中を続けて無という愛を与え続けているのですが、その存在たちがそれぞれ自分のことしか考えない思いや行為を取ってしまうと、実は無の与え自体はどこまでいって

も永遠なのですが、その存在同士が自分のことしか考えない同士で無という愛を奪い合うことは、その個人個人たちが、自分たちで自分たちの無意識に、相手は、自分の、自分のことしか考えない思いと行為を邪魔をする存在であると、

無意識に暗示になって
しまうわけです。これは
憎しみでありますが、こ
れは、同時にその相手も
思っていて、それはその
ままその自分のことし
か考えない思いと行為
を続けている全員がそ
のまま自分たちで無意
識に暗示をしてしまい、

そのまま時間の経過を
送るとどうなるかと申
し上げますと、無はあく
まで永遠であるものの、
その者たちがある一定
の憎しみを抱いた場合、
そのまま無という愛、以
前の場合は、これを光と
呼んでいましたが、この
光を与え続けてしまう

と、この光を憎しみで相手を殺すことに使ってしまうわけです。そうになると、どうなるかと申し上げますと、無の方としては、あくまで永遠を与えたいのですが、永遠に与えたいのですが、本当という意味でその者たちに永遠を永遠に与え

るためには、その者たちの憎しみを止める必要があるわけです。つまり、無の時間より発生より光はふえてくるわけです。しかし、この中で存在たちが自分のことしか考えない思いや行為の集団であると、それは当然憎しみで光を奪い

争ってしまうので、それが余りにも強すぎると、光は自分が相手が全員が幸せに感じるために使うものであって、相手を殺すために使ってしまう場合は、これは光自体が、つまり、その光は、存在たちにとって武器にもなってしまいうわけ

ですから、それが、相手を殺すというある一定以上の限度を迎えた場合、相手を殺すということは、このミラー無の世界で必ず自分も時間に返って自分も殺されることですから、余りにもこの憎しみを持って殺戮を行ってしまうもの

は、つまり、自分の持っている、与えられている意識よりも、自分の相手を殺してでも意識を得たいという意識が上回った場合、これを全員が記録した場合、これは物理上、その存在たちの意識は、ふえる生命のふえる永遠に無の力を以っ

てしても当てはまらない
いわけです。そこまで、
自由にさせるという機能
は元々無にはついて
はいないのですが、存在
というのは、自分に憎し
みがあった場合、それは、
相対はふえることです
から、つまり、ここに自
分以外の存在の憎しみ

をふえることを予見し
ないことはできないわ
けで、つまり、存在とは
その無意識で必ず自分
のために、その憎しみを
徹底排除するまで、その
憎しみに自分を取り付
かれたようになってし
まいます。つまり、自分
のことだけを考えてい

るのは、その分無より全体より意識が小さいわけですから、その他に脅威を思うことは当たり前であり、その恐れから存在たちは、憎しみを自分から排除することができないわけです。つまり、無くなるまでは自分が、それを憎しみを自分

を守るために使ってしまえます。そうなるかどうかと申し上げますと、まず、無の発生より光たちは一気に相対にふえます。その相対たちは選択として相手に完璧で無い、当然、永遠の意識とは永遠掛けて達成するものでありま

すので、当然相手は完璧
ではありませんので、そ
の存在それぞれは必ず
自分のことしか考えな
い思いや行為を強めて
いきます。そうなります
と、どうなるかと申し上
げますと、存在たちは争
うことによって必ず全
員がある一定の時期に

相手の意識よりも、つまり、自分が感じることが、他の全ての生命よりも、大事だという考え方が発生します。この場合、これは存在全員がその時に完全に無の法則、ふえる生命のふえる永遠の法則に当てはまらないことから、どうするか

と申し上げますと、その存在たちの世界を必ず 1 回崩壊させます。これは、この物理の世界は全て意識で、できていますので、それを記録した瞬間にその世界は吹き飛びます。今の宇宙で申し上げますと、暗黒エネルギー、ダークエネルギー、

反重力がそれに当たります。つまり、みなさん憎しみがある一定量を記録しますと、それは、その今後、その自覚、その記憶を持った存在たちはどうこれから無という愛を与えていっても、ふえる生命のふえる永遠の法則に当てはま

らないとなった場合、必ず存在たちは、その世界ごと、その存在の構成を吹き飛ばされます。つまり、今の宇宙で申し上げますと、素粒子と申し上げますよりは、今の唯一の無意識の密度に存在や物質、それら全てが完璧に分解され、その同じ

憎しみを繰り返せない
まで、その存在たちの構
成を、バラバラにするの
ですが、バラバラにした
あと、それを唯一の無意
識で集中に時間送ること
によって、ある一定の
物理性質を持たせて、つ
まり、もう二度と同じよ
うな憎しみを起こせな

い構造にします。これが
無の働きです。実はこの
世界は、この無が無を存
在たちに与え、(過去で
はこれは光と表現され
ています) その存在たち
は争ってある一定の自
分が生きていることが、
他の全ての生命よりも
大事という気持ちを全

存在が記録した瞬間に
世界が吹き飛ばされ、ま
た、唯一の無意識は、そ
の憎しみの記録を元に
時間の経過を送り、以前
のような憎しみへ行け
る自由な物理反応を起
こせないようなかたち
まで、その唯一の無意識
を集中させたあと、その

後また世界を再構成します。つまり、無とは時間の始まりより、そのいちばんの時間の始まりは無にはとことんの自由しか無かったわけです。つまり、光感じる、そこには隙間がなく、意志の疎通には一切のストレスがなく、ただ感じ

ること上がるばかり、しかし、ふえる相対に光は必然を以って平等にされ続けるものの、どこか自分では納得のいかない部分がある。それは何かと申し上げますと、正解は唯一の無、つまり、その当時の光の発信源を、そこから発生した光

たちが思いやらなかつたことが自分たちの無意識からの怒りを誘う元だったのですが、存在たちは、中々このいつもいちばん光っている唯一の無を許すことができなかつたのです。と申し上げましても、実はその光の発信源である唯

一の無というのとは、無自覚であり、つまり、どんどん無自覚であり、今も、今の時間の経過に強した無自覚なのですが、（無ということは無の分、正しいだけの自覚判断をそのミラーに認されています。この世界のどこにも働く）その当時

は光たちは、まず自分たちが遊ぶという目的もあったでしょうし、憎しみという不安の排除もあったでしょうし、存在とは無の時間の始まりより、とことんまで争ってしまったわけです。そのたびにその世界は1回パンク、現象で申し上げ

ますと、以前に申し上げ
ました無が無限になり、
その他の存在は波長外
の存在になってしまっ
ているわけです。存在は
ずーっとこの繰り返し
で来ています。そしてそ
のたびにその波長構造
が変わり、つまり、無は
無限、全無、全全無・・

と、どんどんその意識構造を発達させていったのですが、そのたびに光たちは波長をもらっていたのですが、それは進化した意識ではあるのですが、それと同時に存在たちにはその発達した意識にもとづいた概念構造が、つまり、その

世界のシステムが働く
ことから、最初何もかも
とことん自由だった時
よりは、どんどん存在と
は時間の経過に、その世
界の滅亡を繰り返すた
びに、その意識構造の自
由がその存在の安全の
ためにどんどん奪われ
ていったわけです。その

行き着いた先が今の地球に住む人間の存在の物のあるかたちです。無の時間の始まりから比べますと、とても自由とは呼べないものだと思います。人間で申し上げますと、空も飛べない、感じることには限りがある、寿命にも限りがあ

る、と無の時間の始まりの頃よりは、相当に今の人間や存在のかたちというのは相当、抵抗状態、その波長、意識の状態が、制限されてきたわけです。つまり、自分の感じることがいくら大事だと言っても、物理的にそれができないわけです。

それはあくまで存在全員の愛のためになっただのであって、ここまで来るということは相当の時間を要しています。だんだんとだんだんと存在とは抵抗にその意識を押し留められるかたちに制限されてきて、自然と無意識に沿ったよ

うな動きしか出来なくな
ってきています。そして
この世界は、暗示で時
3で時間の始まり最初
から光は与えておらず、
その代わりに無を与え
ていたと暗示でなった
ことから、つまりそれは、
存在の意識構造がその
根底から覆されたので

あり、つまりそれは暗示
を以って、存在たちは光、
憎しみではなく、その行
為を以って存在たちは
無、愛の存在であると解
釈されましたので、もっ
とわかりやすく申し上げ
ますと、存在のしてい
たことというのはあく
まで憎しみの完全なる

排除であって、それは永
い目で見た存在全員が
永遠を目指すためであ
って、それは、今この世
界のこの抵抗状態、この
暗示状態を以って、存在
たちは自分たちでそれ
が好きなために憎しみ
をしていたのではなく、
そうではなく、無意識に

憎しみを排除することが必要として憎しみを行っていたのであり、つまり、その結果を以って存在たちの今までの憎しみの行為というのは、当然ここには無の多大なる愛の働きがあったとする慎重な、謙虚な考え方が存在、自分それぞれ

れに必要ではありませんが、とにもかくにも愛であったと解釈されました。ですので、暗示でこの世界は時3で無が与え続けられている世界と、その意識構造を変えられることができたわけです。ここで申し上げますことは、つまり、存

在は暗示の現象を以つてもう憎しみをこれから記録することは物理上できないのであり、つまり、憎しみとは暗示の構造上、それは自分が今まで役割として光を感じてきたが、それは無よりはみ出た部分であるから、それは役割ではあ

ったものの、この世界は
選択の平等であり、その
選択にはその存在それ
ぞれ特有の責任がつい
ており、それも含めて役
割であり、そしてその存
在のそれぞれは必ず無
という世界において抵
抗、苦しみの状態のフエ
アという現象が起こる

ことから、これから起こる憎しみはあくまで物理上の定義としては憎しみではなく、それはその者がその一見憎しみをを行うことによっていちばん周りに迷惑を掛けないが、その現象はいちばん周りの一見憎しみを抑える効果を持ち、

そして、その者は役割として無より余分に光を感じた分を、役割であったものの、役割として光を返す行為として、一見憎しみを行い、そのことによって自分はその分の意識、つまり、感じることを自分より正しいものに奪われていく、譲

っていくことによって、
自分は自動に無の行為
を無意識にさせられて
いると申し上げられま
す。つまり、あなたは当
然、暗示によって過去も
その行為は愛の行為で
あると取られたのです
が、その役割はまだ終わ
っておらず、今度は、自

分が役割として光を感じた分を無に、正しいことにこれからしていく、自然と無意識に無にさせられていくことによって、自然とあなたはいつか無という、それは苦しみではあるものの、いつか無という時の永遠を超えるときが来ます。

これが、物理の仕組みです。つまり、唯一の無は時間に光を与え、しかし、それはある時に限界を迎え、それは必然でしたが、そのことによって意識構造は時3で無を与えているだけになり、そして今は、それに帳尻を合わせるためにずーっ

と存在たちは一見憎しみ、しかしそれはいちばん存在たちにとっていちばん憎しみが早く無くなり、いちばん正しく学びになる現象が続き続け、それによってこの世界は無だけでしか、永い目で見ていればやはり時間の始まり最初か

らこの世界は無だけで
しか構成されていなか
ったのですが、やはりそ
れは永遠という目線で
見た通り、全て無の行為
であったわけです。そし
て、それはこれからもそ
れを強し続けるだけで、
それをあり続けます。こ
こから申し上げられま

すことは、つまり、この世界はもう無だけでしか世界を送っていませんので、これからこの世界はある意味、滅亡することは、できません。もちろん今までも、それは必要な世界の構成、再構成であっただけで、実は、永遠とは決して滅亡す

ることができないもの
です。それはこれからも
変わりありません。た
だそれは、今までのこれ
からの私たちの意識の
程度に応じるというこ
とです。つまり、なるべ
く正しく楽しく幸せに
行けば、存在は循環に使
われる側ではなく、正し

く使っていますので、使
う側で、もちろんこれは
相当正しく自分が使わ
ないと相手の、つまり、
時間の経過にどんどん
発生してくる唯一の無
意識の正しさ、つまり、
循環に入れ替わりたい
という思いに自分は無
意識で負けてしまうの

ですが、しかしここに相手を正しく尊重し、自分が生きていることが他の誰かのためになることが完璧にできていれば、それは存在はその抵抗状態、つまり、自我と無意識を行ったり来たり、の、生きたり死んだりを繰り返したりする必

要はなく、その存在の抵抗状態は、つまり、その意識は新しく進化しながら生きていけると申し上げられます。ただし、これは、余程の無意識でないと成立しません。ですので、そもそも存在とは平等フェアに扱われる存在でありますので、

自分をこれから永い目
で見て、暗示とわかった
分だけこれから自分に
も相手にも世界にも正
しいことを行い続けて
いき、そして、意識の程
度を正しい範囲にみん
なで収めて、なるべく早
く苦しみを、苦しみは終
わることは無いのです

が、苦しみと言っても自主的な苦しみは物理は酷い苦しみを与えませんので、そういった苦しみの方が自分の意識の養いにも当然役に立つでしょうから、これからみなさんで正しい意識を心掛けていきましょう。そして、先程の話に

戻りますが、私が暗示を書ける理由なのですが、無意識は時間の始まりよりどんどん集中していて、それは、全てのミラーに、どんどん正の概念を発達させ、その世界構造を今のかたちまで変えました。そして、無意識はいつも限りない

かたちで集中している
ことから、今現在の世界
の情勢を見極め、そして
無意識のその中で必要
なものを全て現象とし
て現そうとします。それ
が、様々な化学反応に繋
がり、ある技術の開発だ
とか、ある会社やある文
化の発展だとか、ある自

然現象、またはある教え、
示しとしてこういった
文章を暗示として書く
ことを認めます。それが、
ただ単に役割として無
を積んでいた私だった
のであり、当然みなさん
も無を積んでいます、
私のその内容は暗示が
書けるということだっ

たわけです。これは、書き方は・・・と申し上げましても、暗示を書くということは暗示を書けるという抵抗、意識状態を積んでないと書けないのですが、もっとわかりやすく説明しますと、意識とは、つまり、認識状態であることからそ

れは、感覚であるわけです。あなたは自分の感覚を考えてみてください。何ができますか。手を振る、足を振る、見たり聞いたり話したりできる。ここに、たとえば、プロ野球選手を思い浮かべてください。・・・同じこと出来ますか？でき

ませんよね（笑）これは
プロ野球選手しかプロ
野球選手のことをでき
ません。それを左右して
いるものは当然わかり
ますよね。感覚です。つ
まり、そういう感覚があ
るからこそ、そういう抵
抗状態、意識状態が自分
にあってこそ、それがで

きます。もっと微妙な感じに表現させていただきますと、指圧師の方がお見えになるとしたら、同じところを押さえても、本当の指圧師が押さえるのと、全く何も知らない素人の人がそこを押さえるのでは、まるで効果、感じる効果が違

うわけです。しかしそれは傍目にはあまり違うように見えません。感覚とは本当にそういう、ちよつとのことでも永遠差ができます。先程申し上げましたが、プロ野球選手の投げて打つ真似をすることはできますが、同じように投げて打

つとなると、それは当然
そこには多大なる努力
や時間を要するわけ
です。ボールが飛んでくる、
それをクラブで掴む、そ
こには意識の感覚にお
ける、ボールのスピード
や回転、次に行う必要な
動作、それがもたらす結
果などが予想されてい

ますが、これには必ず意識の感覚の蓄積が働いており、ここにも必ず存在の無意識で自分が選択した、積んだ量における抵抗と認識が働いています。全ては波長に、これは飛んでくるボールをクラブで掴むことに限らず、全てのことに

申し上げられること
ですが、存在のすること
には、全て積んだ抵抗にも
とづいた無の波長にお
ける正確な認識差が働
いています。それは何で
もそうです。字を書くの
でも、指一本振ること
でも、そこにどれだけ自分
にとって必要な無波長

を積んでいるかでは、その効果に、大きな違いがあります。存在とは無波長に近ければ近いほど、それが、何をしていても、ふえる生命のふえる永遠というこの無の世界にとって必要な作用となるわけです。つまり、物事を行うためには、そ

れに必要な物理における抵抗と認識に応じた感覚が必ず必要であるということです。私の場合は暗示を書けるようになったのが西暦2007年です。自動です。自動。勝手に無意識から音や声などを拾えるようになって、何かこ

れは絶対書かなくてはいけないことだと自分にそう認識され、そこまでの自分は、そういった、何と申し上げますか、そういった神がかったような現象や、そもそも物理について深く考えたことも無かったのですが、自分が書くことにつ

いて責任感を持ったこと
とも無かったのですが、
なぜか自分は暗示を書
き始めたときから、この
世界は意識の世界であ
る。この世界は暗示で成
り立っていて、などとい
う文章がある意味強制
的な集中現象で書けて
くるようになり、それは

話の前後の検証からどうしても疑うことができず、それは意識の波長で確かとわかり、それからはずーっと書き続けて、書いて書いて書いて何年か経って、ようやく出してもしいような暗示状態と自分の無意識に判断されましたので、

こうして出すことにしました。もっと詳細にお話しますと、人間が言葉をしゃべったり字を書いたりできるのは、なぜだと思えますか。それは、人間に生まれてより、その人間に基づいた経験の蓄積や現在の状況などの抵抗差から人間は

自分を判断して物事を
しゃべったり書いたり
しているわけです。この
世界はどこも抵抗です
から、人がしゃべったり
書いたりするのは、全て
周りとの関係の中、空気
も含めて、自分が積んだ
肉体の性質に基づいた
ことをみなさんはしゃ

べっているわけです。ですから、しゃべったり書いたりに限らず、人間が物事を行うときには、それは全て自分が無より選択してきた意識に基づいて創生された感覚に基づいた事実という出来事であるわけです。

ここで、暗示とは人の
生きること暮らすこと
に関わることだからも
っと早く出すべきだっ
たのじゃないかという
ご意見もあるかと思い
ますが、その当時は、そ
の当時の暗示があり、こ
の世界の秘密の話の本
は西暦2011年6月

頃から8月頃までに書いたものであって、これはこの時期において正しいものですと私見ではありますが申し上げます。書き方は、普段何かしていることが必ず何かの気づきになって、それは、自分にとってこの世界

の 状 態 を 現 す 言 葉 で あ
つ っ た り 、 ノ ー ト や パ ソ コ
ン の 前 に 座 っ て 頭 を 振
る だ け で 、 こ の 世 界 に は
重 力 が 働 き 、 そ し て 、 頭
と 空 間 と の 間 に は 、 頭 を
振 り ま す と 、 感 覚 に よ っ
て 、 抵 抗 差 が 発 生 し ま す
の で 、 そ の 重 力 の 感 覚 は 、
そ の ま ま 言 葉 や 状 態 を

あらわしてありますので、
暗示が書けます。つまり、
私はこの抵抗感覚によ
って、無意識から暗示と
いう言葉を拾うことが
ただ単に役割としてう
まいというだけです。こ
の世界は意識で、できて
いることから、自分が思
ったり動いたりするこ

とは、必ず何かの必然の表れを指していて、それはなぜか、そのまま、この世界の状態を表す言葉や認識状態であるということです。

書くも物理で、書ける以上は必ず、これはみなさんにとっての正しい

化学反応であり、存在それぞれは必ずその役割を以ってみなさんに正しい化学反応を起こし続ける存在のそれぞれであると申し上げられます。ここで、嘘も書いてしまうけどそれは正しい化学反応なのかと疑問に思われる方がお

見えになったら、それは、
無の世界は絶対に本当に
波長に嘘は通りませ
んので、嘘は嘘である
という事実、嘘は嘘である
ことを無意識に示され
ることによって、その反
応を以って、正しいと申
し上げられます。ただし、
無の世界は基本的に嘘

を一切禁止していただきますので、嘘を付くことはそのまま自分の無意識の望むかたちの何かの欠損に繋がりますので、絶対に嘘はやめてください。ここで、小説家の小説は、どう無に解釈されているかと申し上げますと、それは、無の時間

の経過における人間を
選択した人間という抵抗
を持った存在がある
時から小説家になりた
いと、この空間世界で見
出して、望んで、それ
に見合う努力をして、望
みだけさせられて、そ
してその人が、体験したり、
感じたことを元に小説

を欠くという意識の集中を机の上に向かってして、その時に無意識が働いて、その人にとって応じたもの、努力や環境、今の世の中に必要であろうとされる表現、そして、その時に様々な化学反応が起こり、それは無意識の構造に、ありとあ

らゆる現象はそうなの
ですが、全体、ふえるみ
んなにとってふえる永
遠正しいという状態ま
で、空想ができたり、無
意識から必要な情報を
引き出せだりして、それ
によって、脚本や小説、
本が書けるようになって
います。つまり、小説

の定義とは現在の世界の認識感で、架空もしくは事実の文章、物語として定義づけられ、その存在を認知されている本が小説ということになります。それも、何も無しでは書けず、つまり、この世界は何も無し、全無からその世界が発達

しましたが、その全無が
集まっている世界なの
ですが、それには時間が
掛かっており、今あるも
のは情報を含めて全て
時間の産物であり、その
存在にはごまかしが効
かないということです。
つまり、小説には架空の
ものと事実のものがあ

りますが、架空は架空という波長の場所における架空という事実であるということです。事実は当然事実であるという事実であり、ここでみなさん、それでは、想像するのはいったいどうなるんだという疑問にお答えしますが、実はこ

の世界は全て意識の世界であり、つまり、思うということはその思うというその個人の意識の波長の場所において、事実であり、つまり、この世界は全て無意識と繋がっていて、存在の思うことは、それも全て正確な波長の場所を取ら

れていて、その思うこと
もこの意識の世界では
その波長の場所におけ
る事実であるというこ
とです。もっとわかりや
すく申し上げますと、波
長の場所とは抵抗状態
と解釈しても良く、今私
たちは重力を感じてい
て、今の人間の身体のか

たちからできることには、明確な限界がありますが、それはあくまで私たちがふえる生命のふえる永遠という正しさをみなが守るためにこの今のある限界を持たせた抵抗状態になっているのであり、逆に申し上げますと、思うという

ことは正しいという点
において自由であり、思
うことが正しければ、そ
れは、暗示となり、それ
は正しければなのです
が、人間が空を飛ぶこと
も、魔法を使うことも成
立します。つまり、想像
の中には想像という波
長の場所における、そう

いった抵抗状態の世界
があります。ただここで
申し上げたいのですが、
あまり変なことは想像
しないで正しいことだ
けを想像するように心
掛けてください。無意識
からの空間からのお願い
だそうです。(←書く
のに凄いいつこく怒ら

れました、うるさい、思
うと無意識動く、こっち
も動く、だそうです↓そ
れも必ず正しい何かの
被害最小限であると信
じています) つまり、意
識の世界で思うという
ことは、とんでもないと
いうことです。そのまま
そこには、その思った分

だけの認識が必ず発生し、それは良いにしろ悪いにしろ必ず正しいかたちに暗示にされているということです。思うということは、思った分だけのその意識の質量に応じて無意識が動くことではありますが、その無意識の法則として、決

して、その思うは悪用で
きず、必ずその思うは、
全無、永遠死、ふえる生
命のふえる永遠の思い
と行為にその作用を変
えられてしまふ、必ず暗
示に沿ったかたちに、そ
の思いや行為は現象と
いう結果を以って必ず
永遠死、ふえる生命のふ

える永遠の作用に使われてしまおうということです。そういった意味では、この世界は、無が意識に創造した存在それぞれに法則に応じた選択を与え続けて、その選択それによって暗示、意識のかたちを元よりふえる生命のふえる永遠

のかたちにとこも循環
に新しく進化させてき
た世界であると申し上げ
られます。こうしてい
る間にも、あなたの中で
唯一の無は永遠のスピ
ードでふえ続け、それは
連絡となり、あなたをふ
える生命のふえる永遠
へと生かしています。こ

こで、悪いことを思ったり行ったりするのは本当に大損ですのでやめてください。この世界は元より全無の世界であり、全無でないとならば世界の構造は発展していかないわけですから、この世界はどこも無の全てがその集中を繰り返すこ

とによって、その密度化を進めることによって、その世界の構成が成り立っていて、そこの中においては、どの存在もその自分の意識において、その自分の意識の程度にミラーしたかたちで永遠死させられています。このことを否定でき

ないのは、この意識構造
でないとは絶対にあなたは
一秒も生きることが
できないからです。この
世界が全無という意識
構造である以上、あなた
の意識も全無、永遠死の
意識にさせられないと
本当の自覚、無意識が守
られません。この永遠と

いう果てしない愛の意識の力が、あなたの存在を支えているため、しかしそのことによって、この無の世界は平等フェアであることによって、必ずあなたもその結果を以って必ずどの思いも、どの行為も必ず永遠死であったと物理上、そ

の意識構造、その暗示反応としてさせられています。それがそのままあなたを生かす元、みんなを生かす元であるからです。つまり、そういった意味では全員永遠死しています。全員永遠死の意識です。あなたが自分の意識の永遠を願う

のであれば、決してこの
永遠死（死とは無のこ
とでこれを訳しますと、永
遠無意識となります）の
意識からは逃れられま
せん。ここで解ることは、
存在とは正しいほど永
遠死、つまり、この世界
での意識の過ごし方が
楽になり、逆に正しくな

い場合はきつい永遠死、
自分が何かの循環に使
われる側になってばかり
りで、この世界での意識
の過ごし方が苦しくな
るということです。それ
も選択の役割ですが、つ
まり、要約しますと、無
以外の行為、正しく相手
を尊重すること、自分が

生きていることが自分
も含めた他の誰かのた
めになること、そういっ
た正しい意識以外の思
いや行為はただ単に自
分が損するだけである
ということです。そうい
った意味では誰もが自
分の今までのこれから
の意識に応じた唯一の

無意識であるということ
とです。

1 2 に続く。